

実践のまとめ（小学校３・４年 道徳科）

授業公開日 令和６年９月２０日第５校時

指導者 村上市立朝日みどり小学校

教諭 渡辺 知佳

１ 研究テーマ

自他の関わりを通して、自己の生き方について考えを深める「特別の教科 道徳」の工夫 ～ねらいを明確にし、多面的・多角的に考えるための指導～

２ 研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

学校教育の動向から

「特別な教科 道徳」における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業について、以下のように捉える。

＜主体的な学び＞自己評価や相互評価を通じて、自身のよい点や可能性に気づき、主体的な学習に取り組む意欲を高める。

＜対話的な学び＞ペアやグループで話し合い、問題点を解決するためにはどのような行動を取ればよいのかなどについて多面的・多角的に考えて議論を深める。

＜深い学び＞教材の登場人物の心情・行動を自分の生活経験と比べ、多面的・多角的に考えることを通し、道徳的価値の理解を深める。

この３つの視点に共通することは、「自他の関わり」によって「自己の生き方について考えを深める」ということであると考え。その実現に向け、「ねらいを明確にすること」や「多面的・多角的に考えること」が大切であると考え、本研究テーマを設定した。

児童の実態から

本学級は、今年度から複式学級になった３年生４名、４年生８名の学級である。新しい環境で前向きに取り組む児童が多い。４年生は、自分の考えを進んで伝え、意見の相違があっても互いに思いを伝え合いながら考えを深めている姿がある。３年生は、じっくりと考えて発言する姿が見られる。一方で、語彙の少なさや自信のなさから思いを表出できずにいることがある。両学年ともに、相手に分かりやすく表現する力が不十分であることや、話し合いでは特定の児童の意見で収束する場面がある。また、授業で習得した知識・技能を生活場面でどう生かすことができるかが課題である。個々の思いを表出し、互いの考えを伝え合うことで、多面的・多角的に考えることができる力を育みたい。

(2) 研究テーマに迫るために

① 自己の考えを広げ、他者の考えを受け止めるための「役割演技」の活用

- ・ 焦点化を図る。（どの場面、関係を演じさせるか。）
- ・ 自分で自由にセリフを考えて演じさせ、①見ていた児童→②演じた児童の順に、感じたことを伝え合い、演者の気づきや演じるとき大事にしたことを明らかにしていく。
- ・ 感情を示す表情カードを活用する。（心のワッペン）

② 多面的・多角的な思考を引き出すための発問の工夫

導入・展開の学習場面において、それぞれ主となる発問を限定し、ねらいに沿った思考の流れを維持できる手立てをとる。

- ・ 導入…道徳的価値に対するイメージを共有する発問
- ・ 課題解決①…教材を通して児童間の道徳的価値に対するイメージにずれを生む発問
- ・ 課題解決②…道徳的価値に対するイメージを見つめ直すことを促す発問

③ ねらいと自己の学びを明確にするためのICT活用場面の工夫

- ・ タブレットのスライド機能を活用して視覚的に教材や課題の把握ができるようにする。
- ・ ハートメーター（「心の数直線３」熊本市教育委員会）を活用して自分の考えを視覚化し、話し合いの土台をつくる。
- ・ 授業支援アプリを活用し、本時の学習と日常生活の架け橋となる振り返りのポートフォ

リオで、学びの蓄積を図る。

(3) 研究テーマにかかわる評価

デジタルワークシートのポートフォリオで、年間を通して見取りながら個の成長を児童自身や保護者と共有することで縦断的な評価を行う。個々の道徳性に係る成長の様子について、発言や会話、感想文やワークシートなどで、以下を見取って評価する。

- ・他者の考え方に触れることで、多面的・多角的な見方へと発展しているか。
- ・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて具体的に理解しようとしたり、道徳的価値を実現することの難しさを自分事として捉え考えようとしたりしているか。
- ・抽出児童を設定し、道徳的価値における知識と行動レベルを3段階に分け、発言・ワークシートから個人内評価により変容を見取る。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

泣いた赤おに B友情、信頼 (きみがいちばんひかるとき 光村図書)

(2) 単元の目標

心から信頼できる友情を育むために、友達の立場や気持ちを考え、自分がどのように接すればよいかを自分に問うことで、友達の思いを考えて行動しようとする心情を育てる。

(3) 評価の視点

道徳的価値の理解	自己を見つめる	多面的・多角的に考える	自己の生き方について考えを深める
友達と協力し合ったり助け合ったりすることの大切さについて考えている。	自分は友達をどのようなものと考え、どのように接してきたかを振り返っている。	友達の考えを聞いて、友達と共に理解し合い、よりよい関係を築くことについて、考えを広げている。	これからよりよい友情を築いていくために、どんなことを大切にすればよいか考えている。

(4) 単元と児童

集団での活動がより活発になり、友達との関係が深まる中学年において、初めての複式学級を経験している子どもたちである。3年生は4名という少人数の中で、強い絆があり相手のためになる言動を互いにできる関係である。一方で、複式となった学級の中では、個々の思いを表出できずにいる場面がある。8名の4年生は、進んで思いを伝えることができる児童が多い。意見の違いや思いのすれ違いからぶつかることがあるが、互いに思いを伝え合い、折合いを付けることができている。友達のよい所を認め合う活動や学校生活の様々な場面において、関わりを大切にしながらよりよい関係がさらに深まり広がるように指導を継続していく。その中で、個々の児童が友達に対する考え方を振り返り、友達とのよりよい関係を考え、互いに助け合おうとする心情を育んでいきたい。

(5) 単元の構想

～人・授業・生活～つながって花開く道徳科の単元構想

<実践授業の単元> 道徳4年「きみがいちばんひかるとき」(光村図書)

- ① 「絵はがきと切手」(B 友情、信頼) → ② 「心のシーソー」(A 善悪の判断、自律、自由と責任)
③ 「決めつけてないかな」(C 公正、公平、社会正義) → 「泣いた赤鬼に」(B 友情、信頼)

B主として人との関わりに関することの中の「友情、信頼」に関連するAとCの内容項目を選択し、ユニットを組む。

① 自己の考えを広げ、他者の考えを受け止めるための「役割演技」の活用

表情ワッペン

友達の多様な考え

⑤ 重点価値項目の設定と授業改善

関連内容のユニット化

～年間の授業を通して～

互いに理解し合い

信頼し合い

助け合おうとする心

② 多面的・多角的な思考を引き出すための発問の工夫

補助発問・問い返し

教師の見取り

<抽出児3名>

A児

道徳性○行動○

B児

道徳性○行動△

C児

道徳性△行動△

→振り返りの記述で見取る。

抽出児の設定

④ 個々の道徳性に係る成長の様子についての見取り

ハートメーター

③ ねらいと自己の学びを明確にするためのICT活用場面の工夫

・授業での変容

発言、ネームプレート
振り返りの記述

・実生活での行動

「いいとこみつけ」

・家庭との情報共有

学級便りの活用

<伸びる力>

・自分事として考える力
・伝え合う力
・実践的行動力

・導入の教材理解

・道徳的価値に対するイメージの共有場面

・振り返りの蓄積(学習支援アプリ)

日常で言葉のシャワー

学校生活

家庭生活

道徳の授業・道徳教育・生活経験

4 本時の展開

(1) ねらい

青鬼を失って初めてその友情に気づき、泣いて悲しむ赤鬼の気持ちを考えたり演技したりすることを通して、本当の友達とは何かについて考えを深めさせる。その中で、友達を犠牲にしてまで人間と過ごすことより、赤鬼にとっても青鬼にとってもお互いにかけてあげのない存在であることが本当の友達であるという思いをもたせることで、日常生活の中で友達と互いに理解し合い、信頼し合い、助け合おうとする心情を育てる。

(2) 展開の構想

① 「対話的な学び」の場面における具体的方策

自己の考えを広げ、他者の考えを受け止めるための「役割演技」の活用

- ・中心発問に関わる、最後の赤鬼が涙を流す場面を演じさせる。
- ・グループごとにペアで演技し、見ていた児童に感想を聞く。

② 児童が働かせる「見方・考え方」と具体的方策

多面的・多角的な思考を引き出すための発問と問い返し

- ・導入…道徳的価値に対するイメージを共有する発問をする。
- ・課題解決①…児童間の道徳的価値に対し、考えの理由を問う。
- ・課題解決②…道徳的価値に対するイメージを見つめ直す問い返しをする。

③ 学びの価値や深まり自己の変容を自覚化させるための振り返りにおける具体的方策

ねらいと自己の考えを明確にするためのICT活用場面の工夫

- ・タブレットのスライド機能を活用し、視覚的に教材や課題の把握ができるようにする。
- ・「ハートメーター（デジタル心情カード）」を活用し、赤鬼と青鬼は「本当の友達だと思う・思わない」について友達の考えが瞬時に視覚的に理解できるようにする。
- ・「ロイロノート」を活用し、本時の学習と日常生活の架け橋となる振り返りのポートフォリオを蓄積する。

(3) 展開

段階	T：教師の主な働きかけ C：児童の追求の意識 ★C：「見方・考え方」を働かせた児童の姿	・留意点 ○評価 ★働かせる「見方・考え方」
学習意欲の高まり 5分	T：みなさんにとって「友達」とはどんな人ですか。 C：仲よしの人です。 C：一緒に遊んだり、勉強したりする人です。 C：何でも話せる人です。 C：学校で、毎日会う人。 C：他の学校にも友達がいるけれど、毎日会うわけではないなあ。・・・ T：友達にはいろいろな関係がありますね。今日の道徳のお話は友達についてです。登場人物の友達の関係に注目して見てみましょう。	・「友達」についての既有的認識を想起させ、授業後の変容を感じることができるようになる。 ○道徳的価値について自分の日常を振り返って考えている。
	1 「泣いた赤おに」P119の最後まで読む。 T：赤鬼と青鬼は、友達だと思いますか。 (ハートメーターを表示) ★C：思います。「どうしたんだい。」と青鬼が声をかけてあげたからです。 ★C：私も思います。赤鬼も、自分が怒った理由を青鬼に話しているからです。 ★C：思います。青鬼が、赤鬼のために人間と仲よくなるための作戦を考えてあげているからです。	・タブレットのスライド機能で場面絵を提示する。 ・教材を区切って読み、物語の文に捕らわれない児童の本音を引き出す。 ★ハートメーター（デジタル心情カード）を活用して自他の考えが視覚的に分かるようにする。

課題解決①
20分

★C：私は思いません。作戦は、赤鬼にとってはよいですが、青鬼にはよいことがないからです。

T：どちらかが嬉しい気持ちでは、ダメなのですか。

C：「本当の友達」とは言えないと思います。

C：確かに…。

T：「本当の友達」…？…では、これについて、みんなでもう少し考えていきましょう。

◎「本当の友だち」とは、どんな友だちなのか考えよう。

3 続きからP121 L10まで読む。

T：赤鬼に、人間の友達ができて、どんな気持ちになったでしょうね。

C：やっと人間と友達になれて、嬉しい気持ちです。

C：青鬼のおかげだから感謝していると思います。

C：これからは寂しくない気持ちだと思います。

C：毎日が楽しくなりそうだから、わくわくしている気持ちだと思います。

T：みんなも「嬉しい」「ありがとう」の気持ちになりそうですか。

C：…でも、青鬼がかわいそうです。

C：私もそう思います。青鬼は優しいよね。

C：赤鬼も、青鬼に悪いことをしたと思っているのではないかなと思います。

C：赤鬼は、自分のことしか考えていないような気がします。

T：青鬼は、どうなったのでしょうかね。続きを読みます。

4 続きから最後まで読む。

<中心発問>

T：赤鬼は、泣きながらどんなことを思ったのでしょうかね。赤鬼の気持ちになってみましょう。

<役割演技>

T：赤鬼さん、青鬼さんに伝えましょう。

★考える視点

① 友達だと「思う」・「思わない」

② 赤鬼にとって・青鬼にとって

・考える視点を示した座標軸を用いてクラス全体の考えを整理していく。

・きこりの、鬼に対する差別的な見方について「よくない」という発言があれば取り上げる。

★「友情、信頼」に留まらず、「親切」「寛容」「感謝」などの道徳的価値や「自己犠牲」に関わっている発言に問い返し、考えを深める。

★自分事に置き換えて考えている児童の発言を問い返し、それぞれの児童の考えを引き出す。

★赤鬼の気持ちに自我関与して自由に考えられるように促す。

・学習支援アプリの付箋機能に書く。

→セリフや文章にこだわらず、できるだけ多くの思いを簡条書きで書くように伝える。

	赤鬼 C：青鬼は僕のために、ここまでしてくれるのか。 C：僕のことを大切にしてくれる青鬼は、本当の友達だな。 C：こんなに僕のためにしてくれた青鬼に、僕は何もしてあげられていなかった。 C：青鬼は、本当に優しいな。 C：青鬼、本当にごめんね。僕は君のことを考えてあげられなかった。（後悔している。） C：僕は青鬼にとってダメな友達だな。もう取り返しがつかない。 C：青鬼に会いたいなあ。人間のみんなと友達になるよりも、君とこれからも友達でいたいのに。… T：では、なぜ、青鬼は旅に出たのでしょうか…。青鬼の気持ちになって考えている人もいましたね。 青鬼 C：赤鬼、人間の友達ができてよかったなあ。 C：僕と一緒にいると、赤鬼が人間に疑われてしまうかもしれない。 C：離れていても、ずっと君を忘れないよ。 C：赤鬼、人間と仲よく暮らしてね。さようなら。 C：体に気を付けて過ごしてね。	・付箋に書き終わった児童から自由にペアをつくり役割演技をする。 ・教師が役割演技を見ながら全体で発表させる児童をピックアップする。 ★全体の前で演技をする際、見ている児童の感想により、多面的・多角的な考えを広げる。 ★補助発問で「旅に出た青鬼の思い」を考えさせ、多様な感じ方、考え方を引き出す。 ★感情を込めて赤鬼の演技をしている児童と、青鬼の気持ちに沿って考えている児童を出会わせ、さらに役割演技をし、全体で交流する。 ○自分事として捉えて考え、役割演技や発言をしている。
課題解決② 10.分	T：これまで話し合ったことから、「本当の友達」とはどんな友達なのか考えましょう。 ★C：友達の立場になって考えて本当にその人のためになるかを考えることです。 ★C：相手のために勇気を出して行動できることが大事だと思います。 ★C：お互いに思いやる関係が、本当の友達だと思います。 ★C：間違っていることも、しっかり伝えてあげられる関係も、友達でした。 （「絵はがきと切手」より）	★相手の立場や環境について考えることができたことを大いに称賛し、自分事として捉える力を高める。 ★身近な友達との関係をイメージして発言している児童の話を全体に広げる。 ・児童の発言からキーワードを示しながら、整理する。

振り返り 10分	T：自分が考えた「本当の友達」の关系到近づけるといいですね。今日の振り返りをしましょう。 ★C：㊦の学習で、本当の友達とは何かについて考えました。相手の気持ちを大切に、伝えたり行動したりできることが本当の友達だと思いました。㊦れまでの私は、自分が友達だと思った人が友達だと思っていました。㊦れからは、もっと「相手のためになるように」ということを一番に考えて友達と過ごしていきたいです。また、相手が自分のために考えてくれたことには、感謝の気持ちを表したいです。	・学習支援アプリに振り返りを記録し提出させる。 ★振り返りの視点「3つの㊦」を提示し、思いを表出するための手立てとする。 ① ㊦の学習で考えたこと ② ㊦れまでの自分 ③ ㊦れからの自分 ・振り返りは、児童の思いに沿って、伝えても伝えなくてもよいと伝える。 ○3つの視点を参考にしたり、自分の思いを自由に表現したりして振り返りを記録している。
---------------------	---	--

(4) 評価

① 評価の視点

- ・「本当の友達」とは何かについて考え、よい友達関係のために大切なことについて、友達の発表や役割演技を通して多様な視点から考えていたか。（物事を多面的・多角的に考えている様子）
- ・「本当の友達」の関係について大切なことは何か、自分との関わりの中で捉え、考えを深めていたか。（道徳的諸価値についての理解を自分との関わりで深めている様子）

② 評価の方法

- ・児童の発言やつぶやきについて、ネームプレートを貼って記録し見取る。
- ・学習支援アプリに記録した振り返りをもとに個人内評価をする。

<板書計画>

9/20（金）「泣いた赤おに」 **㊦本当の友だちとは、どんな友だちなのかを考えよう。**

これまでの自分

友だちとは？

- ・なかよし
- ・いっしょにいる
- ・何でも言える
- ・いっしょに遊ぶ
- ・いっしょに学習
- ・毎日会う

思う

□おこっている理由を話した

□青おにに対し悪いと思っている

□青おにに感謝している

赤鬼 

□青おにのことを考えていない

□自分のことだけ考えている

□こうかいすると思う

□青おにがかわいそう

□どうしたのと声をかけた

□赤おにのために作戦を考えてあげた

□赤おににとってよい = 友だちが大切

□自分より赤おにのことを大切にしている

青鬼 

□本当はかなしい気持ちなのでは？

□こうなっていたのかな

□おたがいに思いやるのが本当の友だち

思わない

みんなでふりかえり

本当の友だちとは、おたがいのことを考えてすごすることができる関係。

自分のふり返し

㊦の学習で考えたこと

㊦れまでの自分

㊦れからの自分

5 成果と課題

(1) 授業の実際から見る成果

<板書>



<価値内容を組み合わせた単元構想について>

本時の実践に至るまでに、「友情、信頼」に関連する他の内容項目で授業を単元化して取り組んだ。①「絵はがきと切手」(B 友情、信頼)→②「心のシーソー」(A 善悪の判断、自律、自由と責任)→③「決めつけてないかな」(C 公正、公平、社会正義)→④「泣いた赤おに」(B 友情、信頼)である。単元化することにより、児童は、これまでの授業での学びや生活経験と結び付けながら、多様な道徳的価値と関連付けて考えることができた。そこで、児童の多様な価値観を引き出し、内容項目の関連や発展性を考えられるような指導計画を立てることができたと考ええる。実際の授業場面で、「前の道徳で、相手のためを思って行動すると相手に伝わったから…」という発言が児童から出ていた。これは、「絵はがきと切手」(B 友情、信頼)での話し合いの一場面であったとすぐに分かった。「前の道徳で…」といった言葉が児童から頻出するようになったことは成果であると言える。児童がこれまでに道徳の授業で考えたことを、「今」考えていることと結び付けて自分なりの答えを導き出している姿であるからだ。これまでの自分と、これからの自分の生き方について考えることができているという点で、研究テーマにある「自己の生き方について考えを深める」に繋がっていると考える。

<発問の工夫について>

授業の導入で、①道徳的価値に対するイメージを共有する発問、②課題解決で教材を通して児童間の道徳的価値に対するイメージにずれを生む発問と、③道徳的価値に対するイメージを見つめ直すことを促す発問を意識した。主な発問をこの3つに絞って提示することで、児童にじっくり考えさせたい場面を限定した。①では、「友達」とは自分にとってどんな存在であるかを問うことで、児童の思いを引き出しながら本時の課題を設定することができた。②は、本時に深めたい道徳的価値に対する発問である。「赤鬼と青鬼は本当の友達だと思うか」を問うことで、二択から自分の立ち位置を明らかにし、友達と進んで話し合うことができた。③で、これまで話し合ったことから、「自分にとっての本当の友達とは何か」について考えた。実生活と結びつけて考えを深めることができたことができたと考ええる。

<ICT活用の工夫について>

ICTを活用した展開場面は3つである。1つ目は、資料提示でタブレットのスライド機能を用いたことである。教師が資料を読みながら、電子黒板に場面の挿し絵と吹き出しを提示した。タブレットのスライド機能を用いて提示したことで、児童にとって資料の内容理解がスムーズであった。内容がよく理解でき、さらに話を聞きながらすでに実生活と結び付けて考えることができていた児童もいた。読み取りの道徳にならないための手立てとしても有効であると感じた。

2つ目は、自分の考えの立ち位置を明確にするための「ハートメーター」(感情を視覚的に表すもの)の活用である。ペアで考えを交流する場面



で、自分のハートメーターを友達に見せながら、話す姿が見られた。同じ考えでも、ハートの左右のバランスが違っていることが瞬時に分かり、思いの大きさの違いが相手に伝わっていた。

3つ目は、ロイロノートを活用した「振り返り」の場面である。ポートフォリオが容易で、教師も児童も見たい時にすぐに見ることができるのが利点であり、考えの変容や深まりを自覚することができた。

(2) 今後の課題

<「役割演技」について>

「役割演技」は、回数を重ねるごとに慣れ、自発的に教材の場面について演技をし始めるペアも出てきた。しかし、本時の「役割演技」では、ペアによって演技の内容の違いが見られた。感じたことから自由にセリフを考えて演技しているペアと、なかなか思いを言葉にできないペアがあった。4年生の中には、表現への恥ずかしさが見られるようになった児童もいた。3・4年生の児童の発達段階や個々の生活経験などが大きく関連していることを考慮し、役割演技だけではなく、児童の実態を把握して、教材の登場人物の気持ちになって感情を表現できるような工夫をしていきたいと感じた。

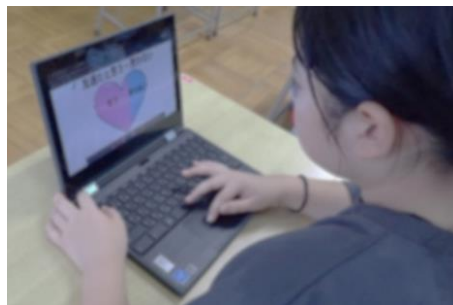
本実践を通して、「役割演技」は、演技をするペアの様子を見て自分なりに感じたことを様々な児童に聞き、全体に広げていくことで演技をする側だけでなく、見ていた側の考えが深まることにもつながる有効な手立てであると改めて感じることができたため、今後も取り入れていきたい。

<日常生活での見取りについて>

道徳の授業で考えたことや、自己の変容を自覚できたことについて、日常生活でもしっかりと見取っていくことが大切であると考えている。教師がアンテナを張って、児童の発言や行動について気付いたときに少しでも記録として残していくことで、児童一人一人の道徳性の伸長を見取ることができると考える。変容をすぐに求めず、教師が関わる日常の中で「その子なり」の変化に気付いていけるように心がけたいと思う。また、児童への言葉かけや視覚的なコメントなどを蓄積できるようにしたい。

参考文献

- ・小学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」 文部科学省
- ・道徳授業のPDCA 指導と評価の一体化で授業を変える！ 毛内 嘉成 編著 明治図書



ふりかえり

この学習で思ったこと
赤おには、青おにがどこに行ったのだろうと心配していたので、絆が深かったのかな。と思いました。
青おには、赤おにが人間たちと仲良くなれるように、長い長い旅に出たのかな。と思いました。

これまでの自分
今までは、友達が自分のことをぎせいにしても、お礼を言って、また仲良くできていた。

これからの自分
今までと同じで、友達や自分が、自分達のことをぎせいにしても、友達のせいでも自分のせいでもないから笑い合えるといいなと思いました。

